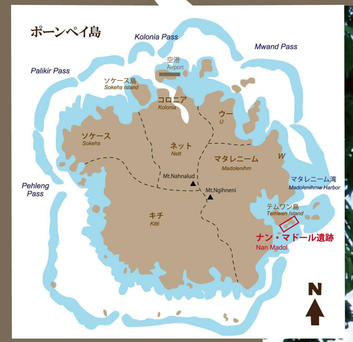
ミクロネシア連邦　ポーンペイ州

ナン・マドール遺跡

The Nan Madol Archaeological Site of Pohnpei



制作 (所在地) :
文化遺産国際協力コンソーシアム (日本)
〒110-8713　東京都台東区上野公園 13-43

協力 (所在地) :
・ミクロネシア連邦政府歴史保存局
　(ミクロネシア連邦)
・UNESCO アビア事務所 (サモア独立国)

Photo credit: Osamu Kataoka

写真：左から、
High Commissioner Midkiff and staff at Nan Madol (N-2360.02)
Family with canoe full of breadfruit passing through Nan Madol, UN photo (N-1893c.04)
Sakau ceremony, Ponape (N-20a)
Ponapeans at Nan Madol, photo by Ted Huggins (N-2377.03)
Photo credits: Trust Territory Photo Archives, Pacific Collection, University of Hawaii-Manoa Library

Nan Madol – the Ancient Sea City of the Pacific

太平洋の真っ只中の島、ミクロネシア連邦ポーンペイ島には、海上に浮かぶ古代都市の遺跡があります。ナン・マドール遺跡です。この遺跡はしばしば「太平洋のベニス」とも形容され、その他に例を見ない奇異さ、巨大さ、壮麗さから多くの人々の関心を引き付けてきました。

1 Temwen Island
2 Sewhiso
3 Likonpalau
4 Nan Lehn Moak
5 Pohn keimw
6 Mweid en Kiti
7 Pahnmweid
8 Mweid
9 Pahnwi
10 Pahnwi
11 Mweiden Welwel
12 Kapinet
13 Mweiden Nahnsapwe
14 Pikalap
15 Mweidalap
16 Lemensai
17 Peinmet
18 Likinsau
19 Sapwei
20 Sapwenleng
21 Pedenleng
22 Pilenleng
23 Pahndipap
24 Pedeped
25 Peinpwe
26 Nihkonok
27 Reilap
28 Dolewe
29 Peilam
30 Reitik
31 Uasau
32 Kelepwel
33 Pahn kedira
34 Place of punishment
35 Temple of Nankieilmwahu
36 Keimwin Mendirip
37 Bathing place
38 Pehi en Mweik
39 Peikapw
40 Namwenias
41 Keimwin Sokehs
42 Tortoise
43 Idehd
44 Peitaup
45 Dekehtik
46 Pahnisiou
47 Peinieir
48 Mand
49 Palakapw
50 Darong
51 Lehnkei
52 Namwen Kau
53 Pohn Pikalap
54 Madol Pah
55 Pehi en Kitel
56 Spring
57 Peidoh
58 Pwiiel
59 Reidipap
60 Sapwereirei
61 Peinmei
62 Likindalok
63 Imwiniap
64 Peinuht
65 Sapwenluhk
66 Devenloale
67 Imwinmap
68 Map
69 Sapwengei
70 Sapwolos
71 Ainiar
72 Sapwenpwe
73 Peiniap
74 Sapwekapw
75 Sapwendau
76 Sapwuhtik
77 Sapwuhdir
78 Nihmokemok
79 Nihrik
80 Nihdor-Reidipap
81 Dauahdpeidak
82 Pohn Dake
83 Dauahdpeidi
84 Usen Pehi
85 Sapwohng
86 Sapwenpei
87 Sakapeilong
88 Likinpei
89 Sakapes
90 Paralap
91 Usennamw
92 Lele Katau
93 Dapahu
94 Pahn Katau
95 Paraka Tuhke
96 Sarwi
97 Madol Powe
98 Peilapalap
99 Rasalap
100 Pwulak
101 Peinering
102 Peinior
103 Pahseid
104 Usen Dau
105 Sapwuhtohr
106 Pwallahing
107 Dewen Nankieilmwahu
108 Peikap Sapwawas
109 Narukep
110 Pahndouwas
111 Dau
112 Dewenkasapal
113 Nan Dawas
114 Pahn Dawas
115 Kenderek
116 Pohnmweirak
117 Peiniot
118 Peiniot
119 Nan Mwoluhsei
120 Lelou
121 Rarian
122 Karian
123 Lukop en karian
124 Lelou
125 Pik en Nahn Sapwe
126 Sapwutik
127 Angeir-Likiangeir
128 Pahn Mwasangapw
129 Lemenkau
130 Pohn Mwudok

ナン・マドール遺跡の概要

Nan Madol,the Ancient Sea City of the Pacific

ナン・マドール遺跡はミクロネシア連邦ポーンペイ島の海上にあり、玄武岩などで構築された大小 95 の人工島が、約 1.5×0.7㎞の範囲に点在する巨石文化の遺跡です。これまでの考古学的調査によると、西暦 500 年頃から人工島の構築が開始され、西暦 1000 ～ 1200 年頃に首長を頂点にシャウテレウル王朝が形成されました。口承伝承は、480 ㎞東のコスラエ島からやってきたイショケレケルという若者に征服されたと伝えており、その時期は西暦 1500 から 1600 年頃と推定されています。この遺跡は王宮・神殿・王墓・居住域からなる複合的な都市遺跡で、95 の島それぞれには固有の名前と口承伝承が伝わっています。各島の間には水路が張り巡らされており、人びとは水路を利用してカヌーで島と島の間を行き来していたと考えられます。

ナン・マドール遺跡はポーンペイ島にかつて存在した壮大な古代王朝の存在を示す証人であり、現地の住民にとってはいまなお神聖な場所として認識されています。さらにこの遺跡は、地球の表面積の三分の一を占める広大な太平洋地域において最も大規模かつ壮麗な遺跡のひとつであり、太平洋地域に住む人々の文化の到達点を示す重要な遺跡でもあります。その意味で、人類全体にとっても顕著な普遍的価値をもつ遺産のひとつであることはまちがいありません。

Photo credit : Osamu Kataoka

Photo credit : Tomo Ishimura

ナンタワス遺跡の外壁の入口部。柱状玄武岩を井桁に組んで構築されている。高さ約 8 メートル。

石材の巨大さ

ナン・マドール遺跡の人工島の多くは、巨大な柱状玄武岩・玄武岩塊およびサンゴ礁などによって構築されています。ナンタワス遺跡では、人工島の上に 8 メートルの高さに井桁状に丁寧に積み上げられた二重の周壁が築かれ、中央石室の天井石の柱状玄武岩は長さ 5 メートルに及びます。この遺跡には、長短さまざまな柱状玄武岩が 6 万本以上使用されています。また、パーンウィ遺跡の南西コーナーには最大 90 トンにも及ぶ巨大な玄武岩塊が 10 メートルの高さに積み上げられています。これらの石材は、遺跡から直線距離にして 25 キロメートル離れた島の反対側のソケース地区や、ウ地区から切り出されたものであることが、岩石の理化学的研究によって判明しています。

これほどの大きさの石材を、どうやって遺跡まで運び、どのようにして組み上げていったかについてはわかっていません。かつて、採石場で熱を加えて水で急速冷却して剥離させた柱状玄武岩を海岸までかつぎ出し、カヌーで運搬するという実験考古学が行われましたが、たった 1 本の玄武岩を移動させるだけでも大変な労働量と運搬技術が不可欠だとわかりました。

ナン・マドール遺跡の石材が切り出された場所のひとつであるソケース地区の岩山

Photo credit : Tomo Ishimura

口承伝承

ナン・マドール遺跡の 95 ある島のひとつひとつには固有の名前がつけられており、その由来を示す口承伝承が残っています。

かつてオロシーパとオロショーパという兄弟がおり、二人は島内各地の人びとの協力を得ながら、北東側の上ナン・マドール、南西側の下ナン・マドールの順に人工島群を建設しました。上ナン・マドールの中心はナンタワスで、全島を支配した王朝の首長たちが中央石室に埋葬されており、戦争時には偉大なる霊魂にカヴァ酒を捧げて勝利の祈りがなされました。また王朝の会議もそこで催されました。

一方、下ナン・マドールのパーンカティラには首長たちが居住し、ナン・マドールでの宗教と行政のセンターとしての役割を果たしていました。

写真上：王墓であったとされるナンタワス遺跡の中央石室
写真下：人工島の間には水路が張り巡らされ、かつても人びとはカヌーを用いて移動していたと思われます

Photo credit : Tomo Ishimura

考古学的成果

これまでの研究により、ポーンペイ島に人類が渡ってきたのは 2000 年前のことで、メラネシアから北上してきた人たちが最初の植民者であると考えられています。

ポーンペイ島の文化は、1820 年代以降にヨーロッパ人と接触するまでは金属器をもたない文化でした。ポーンペイの先史住民は、豊富に玄武岩がありながら、石器文化ではなく貝斧や釣針や装飾品といった貝の文化を発展させました。そのことを示す多種多様な貝製品が、ナン・マドールの人工島遺跡から発見されています。

金属器や石器のような便利な道具をもたない彼らが、ナン・マドールのような巨大遺跡を建築したのは驚きです。

ナン・マドール遺跡から出土した貝の道具 (貝斧・釣針・装飾品など)

Photo credit : Osamu Kataoka

ミクロネシアの巨石文化

ミクロネシア地域には、ナン・マドール遺跡以外にも数多くの巨石文化の考古学的証拠が残されています。例えばグアム・サイパンといったマリアナ諸島には、ラッテストーン (Latte stones) と呼ばれる石柱群が数多く残されており、これらは高床式建造物の土台として用いられたと考えられています。ミクロネシア連邦ヤップ島では、ストーンマネー (石貨) と呼ばれる結晶質石灰岩で作られた石の貨幣が用いられていますが、これらははるばる 400 キロメートル離れたパラオ諸島から切り出され、運ばれてきたものです。パラオ諸島にも、モノリスやストーンフェイス (人面石) や石棺といった記念物が数多く残されています。さらにミクロネシア連邦コスラエ島には、レロ (Lelu) 遺跡というナン・マドール遺跡とよく似た石造の都市遺跡が残されています。

これらの巨石文化の相互のつながりについてはまだ未解明な点も多いのですが、過去の人類の移動や交流を示す重要な証拠と考えられます。

グアムのラッテストーン (マリアナ諸島)

ヤップ島のストーン・マネー

Photo credit : Osamu Kataoka

写真上：外海からの波の影響で、石材が崩落しているカリアン遺跡の事例
写真下：石材が崩落しているナンタワス遺跡の外壁部分

ナン・マドール遺跡の現状

State of Conservation at the Nan Madol Site

ナン・マドール遺跡は、喪われた巨石文化の面影を雄弁に現在にまで伝えますが、一方で遺跡の保存にはさまざまな課題が課せられています。

まず遺跡自体の物理的崩壊というリスクがあります。巨大な玄武岩により組み上げられた構築物の一部は崩壊が進行しています。例えば外海に面した人工島「カリアン」では高波による浸食の影響が顕著にみとめられます。さらに近年の気候変動によって高波の悪影響が進むことが心配されます。

島の間の水路にまでマングローブが繁茂し、水の流れが妨げられ、水路には泥が堆積しています

植物が繁茂し、石造構造物にからみついているパーンウィ遺跡の事例

また、遺跡に繁茂する植物によるネガティブ・インパクトも懸念されます。たとえば樹木から伸びた根が石造建造物を崩している事例が数多く見られます。また、人工島の間に張り巡らされた水路にマングローブが繁茂することで水路の水の流れをさまたげ、水路内に泥が沈澱し、海に浮かぶ遺跡の景観を損ねてしまっていることも懸念されます。近年の気候変動がこうした植物の繁茂に何らかの影響を与えている可能性も否定できません。

これらのリスクを評価し適切に解決するには、さらなる科学的なアセスメントが必要となることは言うまでもありません。重要なのは、人類共通の遺産でもあるこの遺跡の保存にかかる努力を、ただ現地の住民や当局者に押し付けるだけではなく、国際社会が取り組むべき課題として協力していくことが必要なのです。

Photo credit : Tomo Ishimura